

【熊本県文化協会賞】

熊本地震から学んだこと

荒尾市立八幡小学校 6年 山田 紗世

お買い物中に重そうな荷物を持っているお年寄り見たとき、あなたは手を差し伸べられますか？バスの中で「代わりますよ。」と声をかけられますか？それとも、見て見ぬふりをしてしまうのでしょうか。私は「助けたい」という気持ちはあるのに、一步を踏み出して「手伝いましょうか。」と言うことができません。短くて簡単なはずの言葉が、とても長く難しく感じてしまうのです。

『やかんを持った人』を読んだとき、男の子がどんな気持ちでやかんを持ち、避難所のみんなに手を洗ってもらおうとしたのか、すぐにはわかりませんでした。災害で誰もが自分のことで精いっぱいのはずなのに、どうして知らない人を思って行動できるのか、不思議だったのです。

疑問を抱えたまま授業が終わり、家に帰って父と母に相談しました。すると、二人は熊本地震が起きた日のことを話してくれました。当時私は二才で、母と一緒に外に避難したそうです。父は消防団だったので、すぐ消防団の活動に出ました。その日の夜は家族でテントを張って過ごしました。母は、「寒かったし、地鳴りがして怖かった。」と話してくれました。

父は、地震から数日後に被災した家のがれき撤去の手伝いにも行ったそうです。余震が続く中での作業はとても怖かったそうです。我が家は大きな被害はなかったため避難所には行かなかったけれど、父は避難所で人数確認の支援もしたそうです。

「夜中でも起きている人がいて、全員不安そうだった。」と教えてくれました。余震がいつ終わるかもわからない状況で、人々は不安と恐怖を抱えていたのだと思います。私は父に聞きました。

「どうしてそこまでできたの？」  
父は、

「困ってるときって『助けて』っていうのが難しいんだ。だからこそ誰かに助けてもらえるとうれしい。助けるのも勇気がいるけど、まず一步踏み出してごらん。」

「さよも同じ立場なら助けてほしいって思うでしょ？みんなそう。でも言えない。だから助け合いが大事なんだ。小さな力でも集まれば大きな力になるんだよ。さよもその中の一人だったらいいいね。」と続けてくれました。

気づけば一時間以上も話していて、心の中のモヤモヤはすっかり晴れていました。『やかんを持った人』の男の子は、自分にできることを考え、助け合う行動を選んだのだと理解できました。そんな男の子や父のように、私も、まわりを思いやり、誰かを支える一人になっていけたらいいなと思います。